

第232回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の5月の句会記録

能登の大震災は、今なお復興への苦戦最中にあります。時間がかかり、決してスピーディーとは言えませんが、確かに修復に向かっているようです。阪神大震災の直後、神戸で仕事をしていた経験を持つ身、一步一步の前進を確実なものにすること、周囲の方々との絆、結びつきを大切にすること、そんなことを思い出します。頑張れっ！能登！

新聞で読んだのですが、気象エッセイスト倉嶋厚さんの言によりますと、5月は「太陽を踏む季節」であると言います。その訳は「緑陰の雑木林を歩くと、木漏れ日が地面に円形の光景を無数に作っている」のに気が付くそうです。そしてこの光景は真夏よりも、若葉の頃の方が、隙間が多いせいで、夏よりも美しいとあります。俳句を学ぶもの、平素、景を見るにつけても、その着眼点は、如何にあるべきかを考えさせられました。

さて『「元気に百歳」クラブ』の5月「道草」句会は、5月10日（金）、いつものように「新橋ばる一ん」の202号室にて開催されましたが、今回はいつも中心になって句会をリードして下さる奥田和感さんが、4日間の入院ということで、当日は欠席されました。以後は週に一度の通院となるようです。奥田和感さまの一日も早いご回復を祈念しています。

従いまして、今月の出欠状況は、投句での参加者が17名、そのうち句会も参加された方が6名で、少し小型の句会になりましたか。ですがディスカッションは活発でした。なお、君塚明峰さんは、句会当日になっての体調が悪く、句会不参加となりましたので、選句の提出はなさいませんでした。「来週は出席してます」と、仰って下さいましたが、早いご回復を祈念しています。

○ 投句に参加して下さった方々のお名前（17名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○ 句会に参加された方々のお名前は下述の通りです。（6名）

創風さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

投句一覧表の作成から句会後の選句結果の纏めまでの作業は、今月は森田多佳さんに担当していただきました。そして選句結果の纏めを「菖蒲の花」のイラスト画入りに仕上げてくださいました。多佳さん有難うございます。

5月の選句結果ですが、天賞の最多獲得は、晶如さんの句「母になる娘は母にカーネーション」が、天賞三つを獲得しました。時あたかも「母の日」直前の句会でしたが、娘さんが、間もなく自らお母さんになり、実際に母を体験することになる。そんなタイミングで「母の日」を迎えます。お母さんにカーネーションを差し上げて「お母さんありがとう」。これは今まで上げてきたカーネーションとは訳が違い、花の重みが加わっていたと思えます。お母さんがぴかぴか光りますね。 お母さん！万歳！

次に荻女さんの句「すらすらと解く数式や落の皮」が、天賞二つを獲得しました。すらすらと数式を解くことと、落の皮がすらすらと剥けることの対比、天賞推挙のコメントには「落の皮を剥くのも、数式を解くように難しいんだよ」と、ありましたが、五月の持つ爽快感が、句全体に広がりました。

最多得票賞（☆印）は、白然の「五月晴れ良寛堂の沖に佐渡」が、7票をいただきました。もう二十年も前の体感です。良寛さんは越後出雲崎の人、山本家橘屋の長男として生

まれ、良寛堂の建つ地は、山本家の土地だったと聞きました。弟に山本家を任せ、自らは出奔、仙佳和尚に師事し修行しました。詳細は省略しますが、良寛堂の背は越後の海、母の郷里である佐渡島に直面して良寛像が設置されています。「ひと言」欄に、「行きたかった」とありましたので、書かせていただきました。

◎『母になる娘は母にカーネーション』	晶如	天3㊦4
◎『すらすらと解く数式や蔦の皮』	荻女	天2㊦2
◎『五月晴れ良寛堂の沖に佐渡』	白然	天1☆7
◎『麦藁帽汗の匂ひと草の香と』	まさあき	天1☆5
◎『海風の程良き駅の薄暑かな』	明峰	天1☆5
◎『朝焼けに底引き網の出舟かな』	栄女	天1㊦3
◎『利かぬ手の男滝に似たる撥さばき』	錦流	天1㊦3
◎『淡々と生きたき余生夏に入る』	明峰	天1㊦3
◎『黒留を急ぎ脱ぎ捨てソーダ飲み』	一光	天1㊦3
◎『機関車のけむりは昔麦の秋』	明峰	天1㊦2
◎『薫風が身体巡りて我新た』	柴楽	天1㊦2
◎『光線のか細き蔵や麦の秋』	多佳	天1㊦1
◎『五月入り気合を入れて再起動』	蒼樹	天1㊦1
◎『箱根路は富士浮き上がる五月晴れ』	傘吉	☆5

もう一つ、新聞に書かれている俳句の記事について、紹介します。すでにご存じかも知れませんが、毎日新聞の「季語刻々」について書かせていただきます。「季語刻々」は、俳人の坪内揅典さんが、毎日一句、自らは是とする句を披露、数行のコメントを記載しています。最近の句でのお気に入り転写させていただきます。

真白な羽をたたみて薔薇眠る	長谷川 櫂
青芝を踏めば足裏押し返す	辻 恵美子
坂多き町と知りたる薄暑かな	森田純一郎
人々に四つ角広き薄暑かな	中村草田男
分け入っても分け入っても青い山	種田山頭火

俳人の名句を鑑賞することの大切さを、最近は特に感じております。季語とそれ以外の語との対比、上記の句の中で、種田山頭火の句は、五七五などの約束は、まるで考えておりません。ですが、例えば上述の句の「分け入っても」は六音、そこに何があるのかを調べながら、一人で分け入る訳ですが、それが何かを知ることは出来ない。このものがきの中での答えが「青い山」とは……。きっと得るものがある筈です。どっぷりと俳句の中に分け入りましょう。

ただ、私どもの俳句は、有季定型の伝統俳句です。勿論のこと、それが絶対という訳にはいきません。中あは字余りの句を詠むこともあります。住田先生から教わった伝統俳句（有季定型、切れ）五、七 五の十七音を、句形としています。どうぞよろしくお願い致します。

白然記